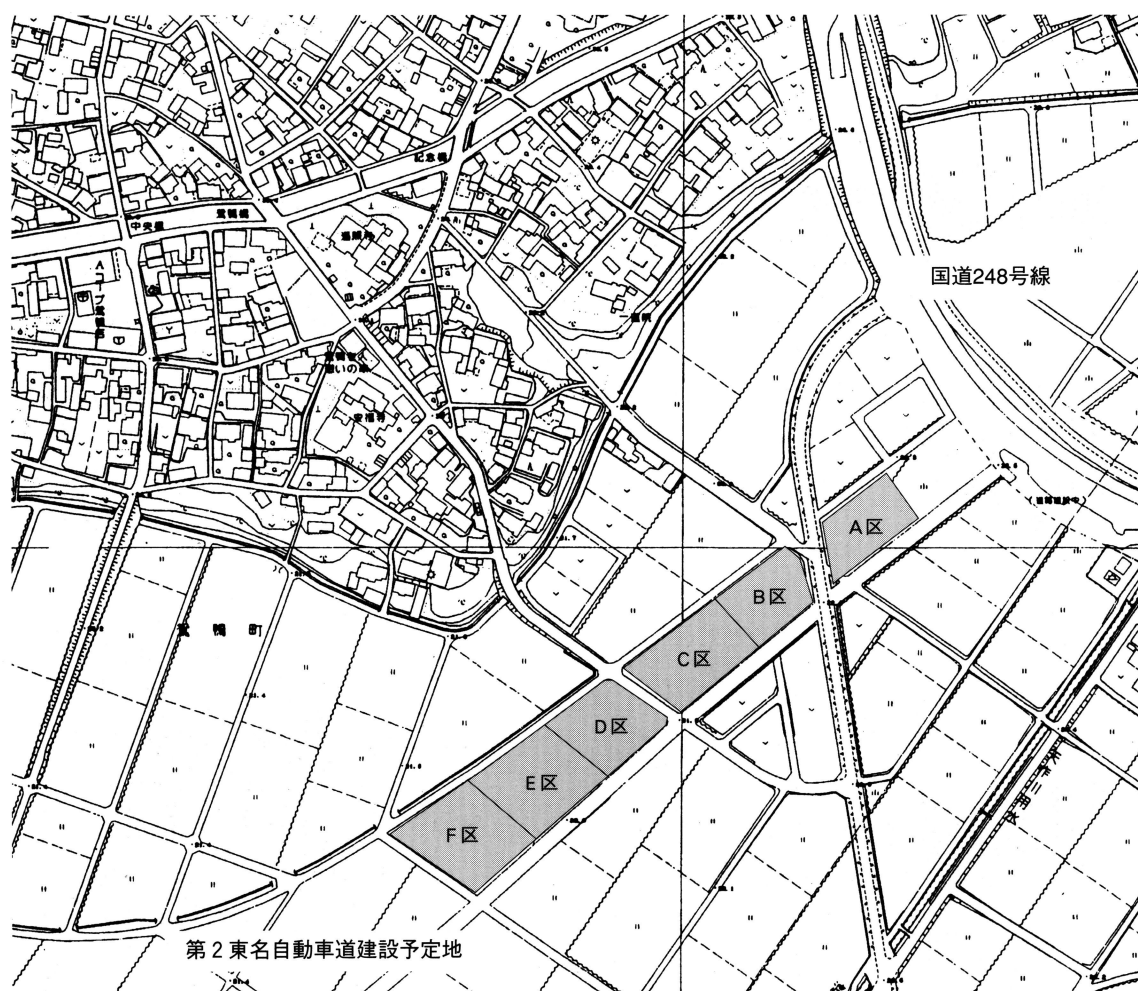


郷上遺跡

調査の経過 郷上遺跡は豊田市の南部、鴛鴨町郷上に所在し、古墳時代から江戸時代までの複合遺跡である。矢作川中流域の沖積平野に位置し、流路とほぼ平行する自然堤防上に立地する。標高は約22mから21mである。発掘調査は第二東海自動車道建設に伴う調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は平成9年4月から平成10年3月まで20,350㎡を調査対象とし、調査区はA区からF区まで合計6区を設定した。

調査の結果、郷上遺跡は古墳時代中期から後期にかけての時期、奈良・平安時代、鎌倉時代、そして戦国時代から江戸時代の4期に大きく区分して考えることができる。その内で、戦国時代から江戸時代にかけては、ほぼ全調査区において遺構・遺物が集中して検出され、郷上遺跡を代表する時期といえよう。



第1図 調査区位置図（1：5000 豊田市基本図「鴛鴨」より）

各調査区で古墳～平安時代の遺構を検出した。以下、時期を追って記述する。

古墳後期

A区の東半部で方墳2基と居住域を確認した。方墳は墳丘部分がすでに削平されており、周溝の一部を調査区東端で検出した。これらの方墳を切って、竪穴住居が16棟重複して築かれている。なかにはカマドが比較的良好に残存しているものもあった。竪穴住居群の時期は5世紀後半で、方墳はそれより若干さかのぼる時期の築造である。

A区からC区にかけて、台地の縁辺部を北東から南西にのびる大溝を総延長約200mにわたって確認した。規模は幅が5～15m、深さ約1.5mで、溝の肩は台地側の方がゆるやかに掘削されている。埋土は大きく2層に分かれ、下層の白色粗粒砂層からは6世紀前半～7世紀前半頃の完形に近い土器が各調査区からほぼ万遍なく出土している。その後、8世紀後半頃に再掘削されており、9世紀後半頃には埋没している。

奈良～平安時代

奈良～平安時代の遺構としては、前述の大溝のほか、E区で竪穴住居10棟と土坑、溝を確認している。竪穴住居群と土坑は8世紀末～9世紀前半頃に属する。溝は竪穴住居群の西側ではほぼ真北方向にのびている。時期は竪穴住居群より古く、8世紀後半頃である。

(木下 一・樋上 昇)



B区大溝全景



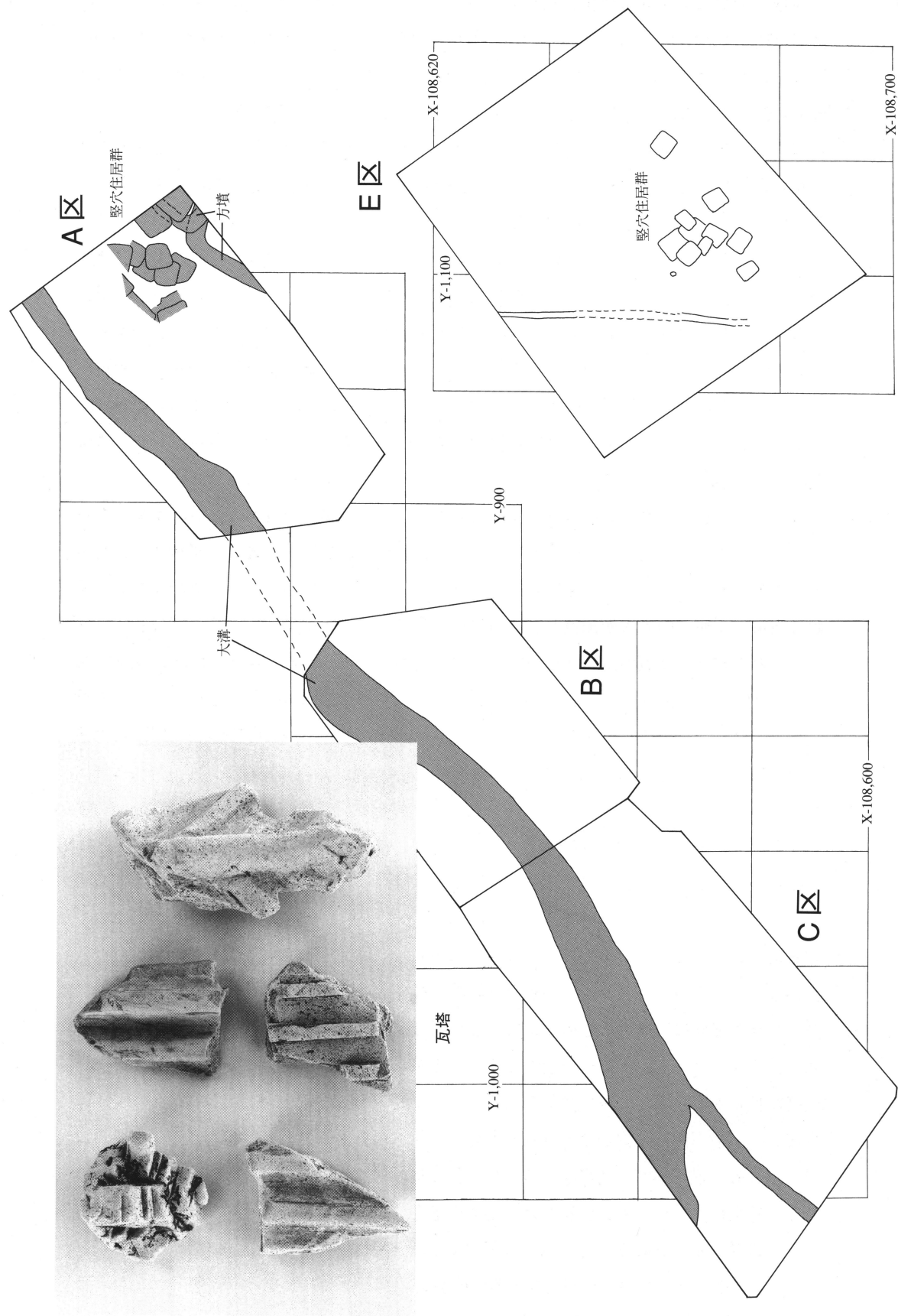
A区竪穴住居群



C区大溝土層断面



E区土器出土状況



第2図 古墳時代遺構図 (1 : 1000)

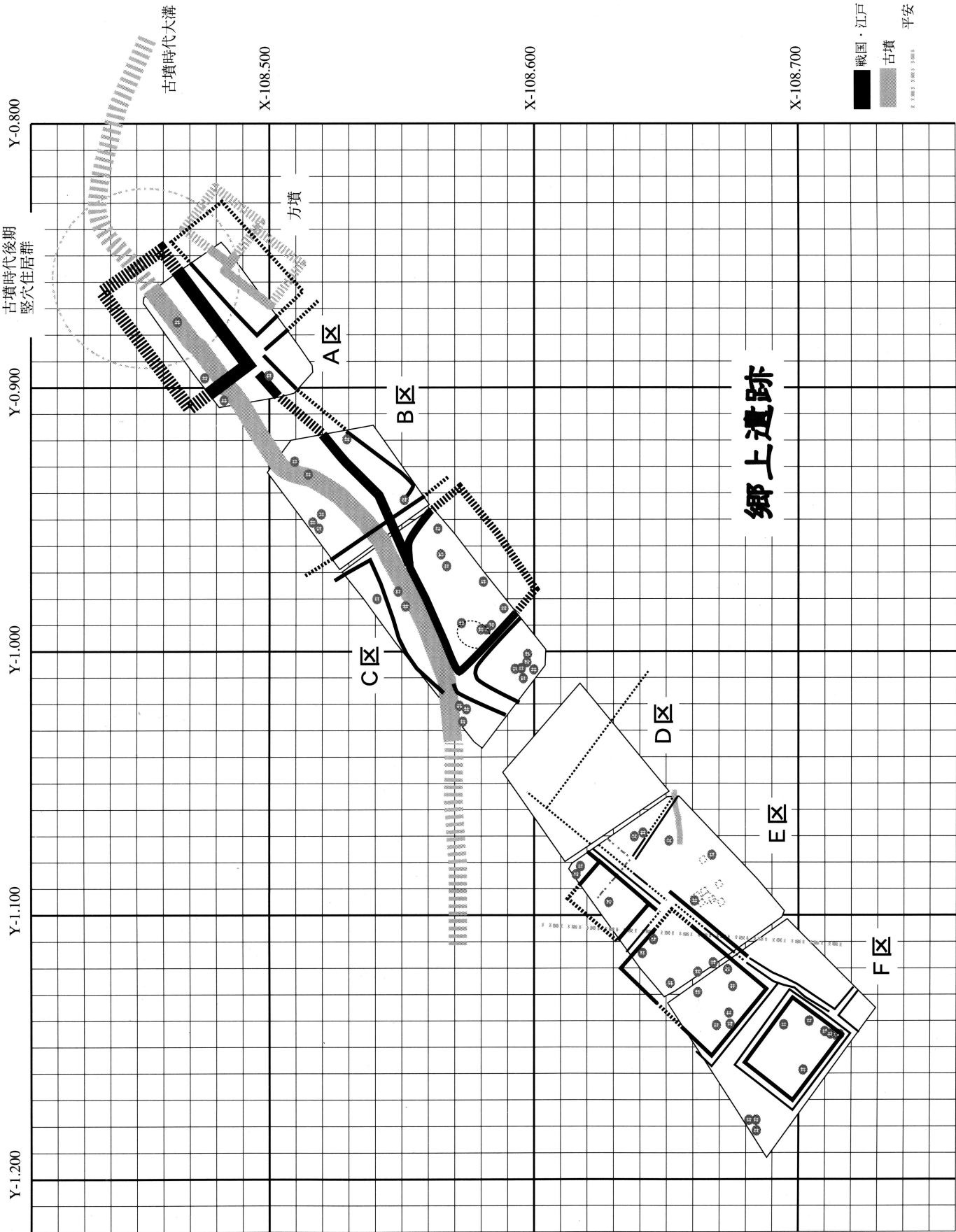
中世

中世の遺構はE・F区で主に検出されており、A～D区では希薄である。主な遺構は溝、土坑、井戸である。E区の北隅ではほぼ北西-南東方向と北東-南西方向の溝各一条が検出されている。攪乱のため確定できないが、直交する位置にあることから屋敷地を方形に区画する溝と考えられる。その他の調査区では明確になっていないが、E・F区では中世の井戸、土坑等が存在することから、部分的であるが中世の屋敷地が展開していたものと考えられる。E区の溝の一方は戦国時代・近世の屋敷地の区画割の中心となる中央溝群の位置と同一である。またその区画割りと同様に他方の溝がそれに対して直交方向に延びている。出土遺物から13世紀代以降この地域に居住域が成立し、この時期の基本的な区画割りが継承され、戦国時代・近世の屋敷地を規制していたものと考えられる。戦国時代及び近世の遺構と混在するため小土坑で中世の時期と確定できるものは少ないが、E区の南東側の方形区画内では他の時期の遺構と重複せず、中世の土坑の集中する部分があり、根固め石がある柱穴が一問間隔で3基並ぶ掘建柱建物を確認された。また、やや大形の中世の土坑はE・F区に散在し、灰釉系陶器が比較的多く出土する遺構もある。井戸は、溝による屋敷地の方形区画のない部分からも検出されている。

戦国時代・

近世

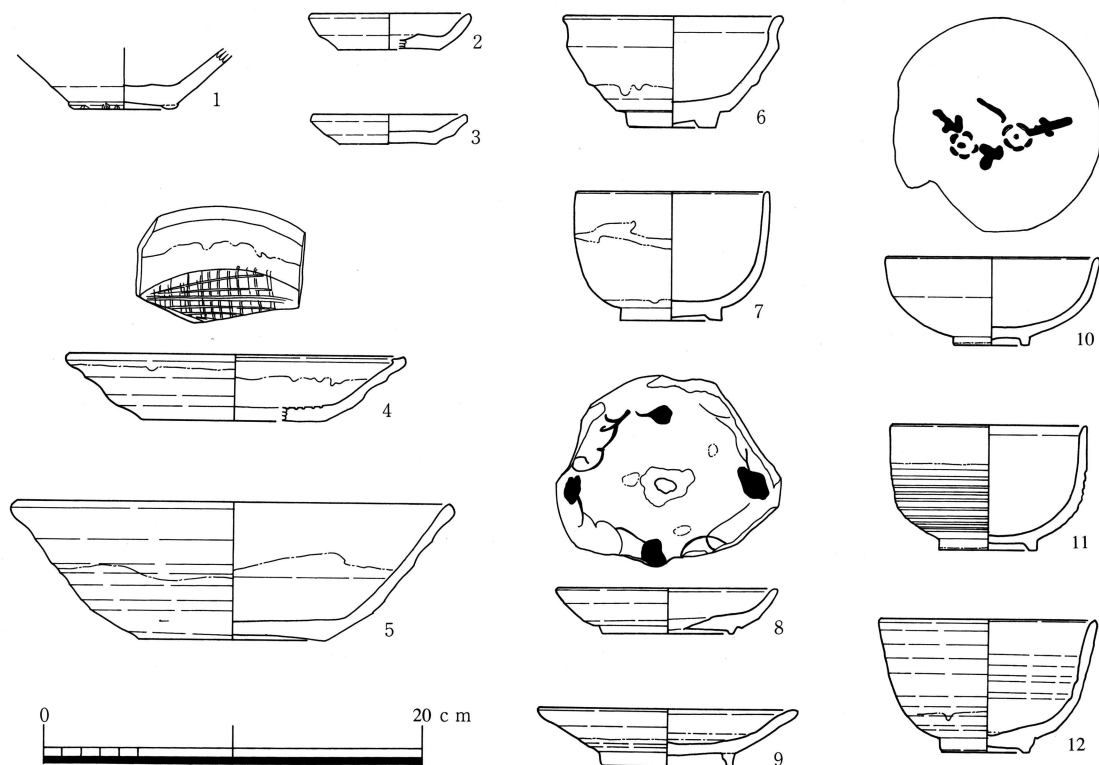
戦国時代から近世の遺構は全調査区に展開している。基本的な遺構は、溝、土坑、井戸であるが、その他、性格不明の大形の落ち込み状の遺構、集石等がある。遺構は、調査区全体を貫く南西-北東方向の数条の中央溝群を中心に位置している。この溝群に対して両側に南東-北西方向の溝が配置し、さらに中央溝群に対して並行して走る溝が離れて存在し、これらによって屋敷地に相当する方形の区画が構成される。溝は時期的に変遷があり、また同位置にあって消滅したものがあることも想定されるが、15世紀後半から18世紀にかけて存続し、この期間溝の基本的な位置関係は変化しない。E区においては北西-南東方向の戦国時代の溝と20世紀初頭まで下がる溝がほぼ同位置にある。中央溝群以外の溝と井戸が切り合う部分が存在し、北西-南東方向の溝は時期が限定される切り合い関係のないものも多く、中央溝群を基本軸として時期によって区画割が部分的に変化していることが認められる。小土坑は多数検出されているが、方形にならび明確に掘建柱建物として認識できるものは少ない。柱根が残るものがあり、残っているものでは直径20cm以下の丸太材のものが大部分である。また、小土坑の底に平らな石をおき礎石とするもの、あるいは根固めを有するものが少数ながら存在する。井戸は偏在するが、遺構の集中する屋敷地内と考えられる部分に位置するものがほとんどである。戦国時代は、平面正方形の井戸枠内に曲物が入られる構造の井戸を基本とする。近世は桶組を井筒とする構造のものである。戦国時代と考えられる井戸で桶組と曲物によって構成されるものが2例存在する。井筒を桶組とし、最下段に曲物を使用されるもので、戦国時代から近世への過渡的形態の井戸と考えられる。性格不明の直径数mの大形の落ち込み状の土坑が、区画内に数基程度認められる。近世のものが多く、土質及び木製品の遺存状況の良好なことから池のように滞水していた遺構と推定される。その他、区画内に1あるいは2基ほど集石が認められる。近世の遺物が多数含まれており、石及び陶器類の廃棄遺構と考えられる。



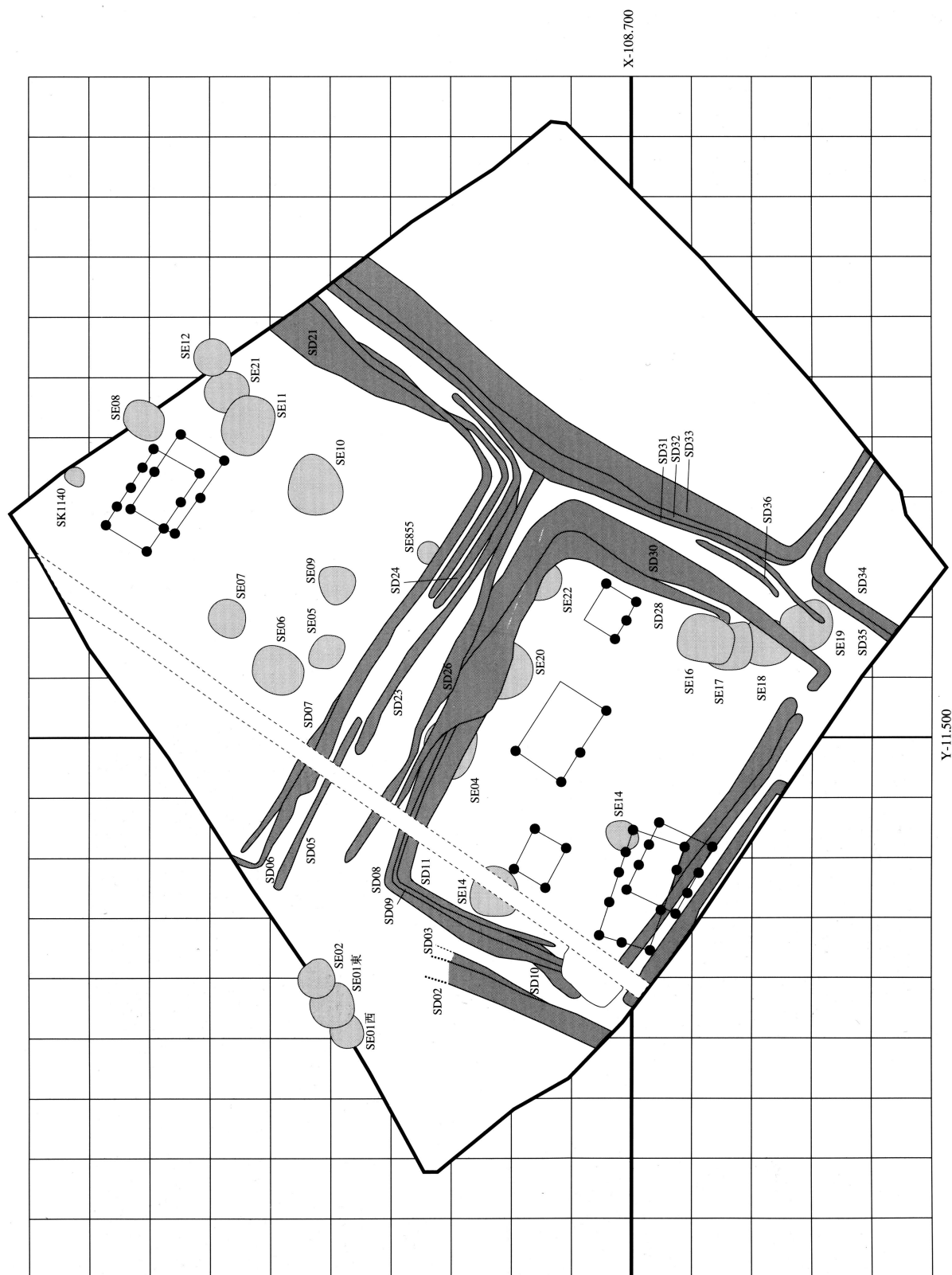
第3図 遺構図 (1 : 2000)

F区

F区は、戦国時代・近世の遺構が集中しており、その南西部から屋敷地の一区画全体が検出された。区画は長辺40m、短辺25mである。区画を構成する溝は、最も深い部分で検出面から約0.8m、幅約3mを測る。2～3条が切り合い、大きく16世紀後半～17世紀前半と17世紀後半の2時期に別れる。溝には高低差があり、場所によって幅、深さとも大きな差がある。また、中央溝群以外の部分では井戸ときりあっていることから時期的な溝の変遷が認められるが、戦国時代末から近世にかけて基本的な区画割りの変化はないと考えられる。中央溝群と北西-南東溝が交わる東コーナーの溝底面には、根固め石が2個置かれた方形の土坑が検出されており、溝に架かる橋の橋脚の柱穴と考えられる。区画内には小土坑が密集しており、若干の小土坑は方形に並ぶことから掘建柱建物と確認できるものがある。柱根の遺存するものでは一辺20cmほどの角材が検出されたものが4基存在する。また、小土坑底面に礎石状に平らな石を置いた柱穴が十数基検出された。これらの掘建柱建物は近世の時期と考えられる。井戸は、方形井戸枠と桶組のものが確認され、方形井戸枠のものに重複して桶組が造られているものが2基あり、継続性が認められる。遺構の密度と出土遺物から、この区画が若干変化しつつ長期間に渡って屋敷地となっていたと考えられる。この遺構の集中する区画に対して、南東側の区画はこの時期及び中世の遺構などもほとんど検出されない。屋敷地とは考えられず、中世から一貫して耕作地などとして利用されていたと推定される。



第4図 出土遺物 1～3：C区SE19 4・5：C区SD48 6：C区SD02
7～9：C区SD12 10～12：A区SD03



第5図 97F区遺構図(1:500)

まとめ 遺跡の時期は古墳時代から近世に及び、その面積も広く、未調査部分があることから詳細は今後に待つところがある。古墳時代の遺構は調査区域北部に集中し、竪穴住居の存在から居住域が成立したことが確認された。同時に、大溝と方墳なども検出され、この時期から周辺の沖積低地部において活発な活動が開始されたことが推測される。この区域の調査は来年度もあり、新しい事実が明らかになるものと考えられる。奈良時代あるいは平安時代初期にも狭い範囲であるが、居住域が存在することが確認された。しかし、区域が異なり、前後の時期との集落の継続性は認められない。

古代集落が断絶して本格的に居住域がこの地域に成立するのは中世13世紀である。戦国時代・近世ほど遺構は密ではなく部分的であるが、ある程度の広がりや集中をみせ、継続的な集落が展開することが確認できる。この時期以降近世18世紀まで屋敷地はある程度の変遷を見せつつ、恒常的に営まれる。集落の基本的な屋敷地の配置、あるいは区画割りは中世に成立したものが継承される。集落が消滅する時期に関しては、文献などでは18世紀と考えられている。この時期、頻発する洪水を避けて現在の台地上の鴛鴨集落の位置に移動したとされる。このことは、19世紀以後の集落に関する遺構が激減することから裏付けられる。その後、この地域は耕作地として引き続き利用されており、19～20世紀初頭の溝などが戦国時代の溝と同位置に検出されている。今回確認された集落の屋敷地の区画割りは、明治期の地籍図と基本的に合致し、昭和初期まで耕地の区画として存続した。今後は、遺構の消長を文献史料等と照らし合わせるなど、より詳細な考察をする必要がある。

(酒井俊彦)



F区屋敷地方形区画



橋脚柱穴



桶組井戸



礎石・柱根